尾崎翠「こほろぎ嬢」試論
――「図書館」「産婆学の暗記者」をめぐって――

山根直子

はじめに

尾崎翠「こほろぎ嬢」は、一九三二年七月号『火の鳥』に発表された。登場人物の重複がみられる「第七官界彷徨」（『文学党員』一九三一年二月・三月号、『新興芸術研究』一九三一年六月）、「歩行」（『家庭』一九三一年九月号）、「地下室アントンの一夜」（『新科学的文芸』一九三二年八月号）とは連作と見なされている。

「こほろぎ嬢」は、語り手「私たち」が「こほろぎ嬢」と呼ばれる女詩人の図書館通いについて語る作品である。主な舞台は図書館であり、これに注目した先行研究では、こほろぎ嬢が求める情報を得られなかった点に着目し、当時の主要な東京の図書館が利用料を要したこと、国家による蔵書の検閲がなされていたことを挙げ、女性が学問的知識を享受する困難性を表すとする解釈が多い(一)。本稿はそうした解釈に異を唱えるものではない。しかし、作中には図書館の外観や構造に関する具体的な描写があり、明確なモデル館が存在すると考えられる。こほろぎ嬢の図書館利用を実際の図書館と照らし合わせて考察するためには、まずは先行研究に欠けているモデル館の特定を行う必要があると思われる。

本稿では「こほろぎ嬢」のモデル館の特定を試みる。「阿母は田舎に住んでゐます」というこほろぎ嬢の言葉から、都会であるように思われるが、作中に舞台を東京とする明確な記述はない。翠は一九一七年に上京した後も故郷である鳥取と東京の往復を繰り返し、「こほろぎ嬢」に先行する「歩行」（前掲）では、東京と鳥取が入り混じったような世界が舞台となっている(二)。したがって、作中の図書館は鳥取県の図書館がモデルである可能性もある。そこで、作品の現在時を一九二〇年代半ばから一九三二年とした(三)上で、当時翠が暮らしていた東京及び鳥取の図書館から作中の描写と符合する図書館を調査し、モデル館の特定を試みる。さらに、モデル館の利用実態と「こほろぎ嬢」における図書館利用の在り方を比較し、本作の特徴を探ることにする。

一、モデル館はどこか

一―一、作中の図書館の描写

作中の図書館に関連する描写は、以下の通りである。

図書館は、普通街路からいくらか大空に近い山の上にある。全身灰色を帯びてゐた。この建物の風丰は、こほろぎ嬢にとつて気まぐれな七面鳥であつた。陽が照ると取り澄ました明色の象牙の塔となり、雨が降ると親しみ深い暗色に変つた。

嬢は蹌踉と閲覧室を出て、地下室の薄暗い空気の中へ行かなければならなかつた。

踏幅の狭い石段を下りると右の廊下に出る。右は売店二三の地下室内の街。左に進むと、からだは自然と婦人食堂にはいる。此処は、食事時のほかはいつもひつそりしてゐて、薄暗い空気が動かずにゐた。そしてこほろぎ嬢のためには粉薬用の白湯も備へてあつたわけである。

地下室の庭には、窓硝子の向ふに五月の糠雨が降つてゐる。

こほろぎ嬢は食堂を出てパン屋に行つた。

これらをまとめると、作中の図書館は山の上にあり、独立した建物のようである。外壁は灰色、地上に閲覧室、地下に婦人食堂がある。地下への階段は狭い石段で、階段を下りた右に売店（パン屋）、左に白湯が備えられた婦人食堂。地下室の窓から庭が見える。さらに、こほろぎ嬢のような学生ではない女性も使用できること、彼女が作中で英文学史の本を探していることから、学術書の蔵書があることも重要である。この描写と符合する図書館を、一九二〇年代半ばから一九三二年の鳥取及び東京から探し出そう。

一―二、鳥取の図書館

文部省社会教育局『昭和六年四月現在　全国図書館ニ関スル調査』（文部省社会教育局、一九三一年）に拠れば、一九三一年四月現在で鳥取県に存在した図書館は九館ある。その内訳は公立三館、市立六館。うち、作中に明示されたような独立館は、県立一館、町村立一館である。鳥取県立鳥取図書館編『町村図書館施設経営の手引』（鳥取県立鳥取図書館、一九三六年十一月）に拠れば「町村図書館は主として通俗図書を収集」とあるため、学術書の蔵書が期待できない町村立はモデル館から除外すべきと思われる。したがって、鳥取県では県立図書館のみが候補になる。『鳥取県立鳥取図書館一覧　昭和六年度』（鳥取県立鳥取図書館、一九三一年七月）に拠れば、同図書館は一九二九年八月に設立認可、一九三一年七月開館。地下室は存在するが五坪と非常に小さい。食堂は一階で男女別ではない。場所は「市の要衝たる智頭街道の一角に位する」とある。「こほろぎ嬢」で描写される「普通街路」から離れた「山の上」にないことからモデル館とは考えられない。

一―三、東京の図書館

次に、東京の図書館を見ていく。文部省社会教育局『図書館一覧 昭和七年四月一日現在』（文部省社会教育局、一九三三年）を参考に、独立館であること、一般女性も利用できること、英文学史の蔵書があることを踏まえた上で、独立館ではない市立簡易図書館十七館、渋谷町公会堂附属図書館、東京移動図書館、大井隣保館附属図書館、利用者制限のある各大学付属図書館、南葵文庫、専門分野が異なる藤山工業図書館、東洋文庫、日勝文庫を除外した結果、市立の日比谷図書館、深川図書館、一橋（後の駿河台）図書館、京橋図書館、私立の大橋図書館、品川図書館、官立の帝国図書館の七館が候補となった。なお、深川図書館、京橋図書館、大橋図書館は関東大震災（一九二三年九月）で消失し、再建されている。

七館のうち、地下室と食堂の双方を有していたのは、駿河台図書館、京橋図書館（再建後）、大橋図書館（再建後）、帝国図書館の四館である。駿河台図書館は三階、大橋図書館（再建後）は屋上に食堂が位置している。地下室に食堂が存在したのは京橋図書館（再建後）と帝国図書館の二館のみである。しかし、京橋図書館は、再建された際に区役所との合築となり、独立館ではなくなっている。さらに、再建後は実業図書館として機能したため、本作中のモデル館であるとは考えにくい。したがって、本作の描写と符合する可能性のある図書館は帝国図書館に限られる(四)。そこで、帝国図書館と本作の図書館の描写を詳しく比較していきたい。

帝国図書館

国立国会図書館支部上野図書館編『上野図書館八十年略史』（上野図書館、一九五三年三月）に拠れば、帝国図書館は一九〇六年三月上野公園に建設。上野公園は武蔵野台地の東南端に位置する公園であり(五)、上野の山と不忍池の低地にまたがる。上野駅の標高が五・一メートル、不忍池の標高は九メートルだが、帝国図書館が存在した場所は標高十五・二メートル(六)の台地部にあたる。これは、作中の図書館が山の上にある点と一致している。

また、帝国図書館の外壁はコンクリート、石、白煉瓦である(七)。コンクリートと石の部位は白から灰色であり、天候によって明度が変化して見える点で、作中の図書館の「全身灰色」で「陽が照ると取り澄ました明色の象牙の塔となり、雨が降ると親しみ深い暗色に変つた」という描写に近いと思われる。

さらに、「地下室に下る階段は花崗岩で作つた」（『上野図書館八十年略史』）とあるのは、作中で地下への階段が石段であることと一致する。帝国図書館は、「二階の特別閲覧室は、五六坪で約六〇名収容し、その一隅に二〇坪の婦人閲覧室を設け、その隣に三一坪の目録室を設けた。三階の普通閲覧室は、約三百坪の大広間で、約二五〇名を収容」した。「地下室は、職員及び閲覧者の食堂を二室、便所・洗面所・下足置場にあて、煖房室及び発電所の設置もあつた」。これは、作中の閲覧室が地上にあり、食堂が地下室にある点と一致する。ただし、「婦人食堂」の存在は確認できなかった。管見では、帝国図書館が描かれた同時代小説においても「食堂」は登場するが「婦人食堂」は見られない(八)。なお、『上野図書館八十年略史』に売店の記載はないが、菊池寛「出世」（前掲注八）に「図書館の中の売店の六銭のカツレツや三銭のさつま汁」とあり、「売店」は存

在していたと思われる。

ちなみに、帝国図書館は何度かの増築工事が行われた[ね]が、地上に閲覧室、地下室に食堂という形に変化はない。『国立国会図書館三十年史』（国立国会図書館、一九七九年三月～一九八〇年三月）には、一九三〇年の増築後の平面図が存在するが、やはり「婦人食堂」の記載はない。

『上野図書館八十年略史』は一九〇六年の新築時の世評として、新聞「日本」一九〇六年三月二十四日第五面「昨日の図書館」を紹介している。「正午いくつかの階段を下りて右し、左して漸く食堂」とあるが、これは作中の「石段を下り」、「右の廊下に出」て、「左に進む」と「食堂」があるという描写と一致する。また、同記事には、「素湯を運ぶ館丁、食堂だけには余り進化の風吹かぬ」とあり、作中の「白湯も備へてあつた」との記述と一致する。

『帝国図書館概覧』（帝国図書館、一九〇六年）の創立時の平面図に拠れば、地下室の食堂の外壁側に窓を示す記号があり、作中の地下室の「食堂」に窓がある点と一致する。また、同平面図には食堂の窓の向こうに空堀（ドライエリア）を示す空間が存在している。作中では地下室の窓から「庭」が見えるとされているが、ドライエリアを指していた可能性がある。

以上、鳥取及び東京の図書館と作中の図書館の描写を比較したところ、帝国図書館が作中の図書館ときわめて高い類似性を持つことが確認できた。作中の図書館のモデル館は帝国図書館であると思われる。

二、帝国図書館の女性による利用実態

前章では「こほろぎ嬢」の図書館のモデルが帝国図書館である可能性が高いことを確認した。そこで、主に同時代の女性作家のエッセイなどから女性による帝国図書館の利用実態を確認し、本作の描写と比較したい。

まず、宮本百合子「蠹魚」（『現代仏教』一九二四年七月号）に、関東大震災（一九二三年九月一日）以前の帝国図書館に関する言及がある。

> 震災後の帝国図書館は知らないが、それ以前でも、上野の図書館は決して愉快なところでもなければ、図書館として充分利用出来る便利な処でもなかつた。
>
> 索引や蔵書の或部門の不備さ等は云はないでも、私には、あの雰囲気――役所くさい、うるほひのない調子だけで親しみ難かつた。

本エッセイには「婦人室」とあるが、図書館用語辞典編集委員会『最新　図書館用語大辞典』（柏書房、二〇〇四年四月）に拠れば、当時、帝国図書館を初めとする多くの図書館が男性と区別して婦人閲覧室を設けていた。作中でこほろぎ嬢が利用している部屋は「閲覧室」と表現されているが、時代からみて婦人閲覧室を指していると思われる。

宮本は「蠹魚」で関東大震災以前の帝国図書館を否定的に述べているが、これは吉屋信子も同様で、『処女読本』（健文社、一九三六年五月）「図書館のこと」で次のように述べている。

> まあ行くといきなり、かう重苦しい地下室みたいな出入り

口でうす暗くつて小使みたいな人まで官僚的でゐばつてゐるやうで、本の目録を見るのも大変だし本を受けとるところがまるで裁判所の判事や検事でも控えているやうな高いところでこちらはおさばきを受ける人民みたいで……それに婦人室は古くてがたがたして居て、がらんとだゝ広くて落付きがなく、卓上なんかお化屋敷から持つて来たやうなもので……何だかとてもすべての感触がラフで陰惨でした。〈中略〉向ふ側にゐる年齢とつた女のひとが、ひろげた本の上につツ伏して、いつの間にか、ぐうぐう疲れた様に寝てゐるのです。〈中略〉その人がぴちやんこに顔を押しつけて眠つてゐる其の本を見るともなしに眼をやると、何かお産婆の試験を受ける為の御本なのでせうか、赤ちやんがねずみの子みたいに小さく丸まつておなかにかぢかんでゐる絵が出ている頁が開いてあるのですもの――私、もうすつかり我が世が寂しくなつて……しよんぼり館を出ました。

『吉屋信子全集』第十二巻（朝日新聞社、一九七六年一月）に拠れば、吉屋が上京したのは一九一五年であり、彼女が初めて帝国図書館を訪れたのはその時分と見られる。こほろぎ嬢は「婦人食堂」の「先客」を「産婆学の暗記者」と思い込むが、吉屋信子「図書館のこと」にも、帝国図書館で実際に産婆学の試験勉強をする女性が登場しており、この点まことに興味深い。

婦人閲覧室を宮本百合子や吉屋信子は居心地が悪いとしていたが、一九三〇年の増築後は状況が変化したようである。宮本百合子「三つの「女大学」」（『婦人公論』一九四〇年三月号）には次のようにある。

何年ぶりかで珍しく上野の図書館へ行つた。むかし袴をはいて通つた時分からみると婦人閲覧室もずつと広く居心地よいところになつたし、いろいろ変つてゐるけれども、本を借り出すところが一段高くなつてそこに係の人がゐる役所めいた様子は、やつぱりもとのままのこつてゐる。〈中略〉若い婦人の本借り出しもなかなか多い。

「むかし袴をはいて通つた時分」とは、『宮本百合子全集別冊』（新日本出版社、一九八一年十二月）の「年譜」からみて一九一三年頃である(十)。その頃と比べ、増築された一九三〇年以降は婦人閲覧室の居心地が良くなり、活発に利用されていたようである。

最も詳しく女性による帝国図書館の利用について言及したエッセイは、同じく宮本百合子「図書館」（『文芸』一九四七年三月）であろう。

婦人閲覧室が別になつてゐたとき、その室には女ばかりの空気があつて女学校の寄宿舎の勉強室のやうであつた。同時に、友達同士で来てゐる人たちの私語がかなりやかましいやうなときもあつた。〈中略〉度々同じ閲覧室で出会い、ときには必要な本の索引のひきかたをきゝ合つたりすることから、婦人閲覧室の仲間が出来て、東京でたつた一つ、それがきつかけとなつてゐる興味ある婦人たちのグループがある。〈中略〉若い女性の心にうごく願望に導かれて、

それらの人はばら〳〵に図書館に来て、学校の課目や勤めの義務以外の勉強をしてゐるうちに、段々互に顔なじみになり、話しがはじまり、御弁当のとき一緒に食堂へ行くやうなことから、一つの集りが出来た。

このエッセイから、「婦人閲覧室が別になつてゐたとき」、すなわち、戦前の帝国図書館の婦人閲覧室は、「利用者同士の交流の場」であり、「学校の課目や勤めの義務以外の」自由な学びを享受する場であったことが窺える。

戦前期の婦人閲覧室については、宮崎真紀子「戦前期の図書館における婦人室について　読書する女性を図書館はどう迎えたか」（『図書館界』二〇〇一年十一月）が詳しい。宮崎論文は新聞記事などの用例を挙げながら、婦人閲覧室が必要とされた社会背景を次のように述べている。

婦人閲覧者を嘲弄する光景が、帝国図書館の食堂や休憩室、閲覧室等で日々見受けられ、こうした公徳心の欠如は、男子として恥ずべきことだと非難する論も見られる。また、図書館へ行く女性を揶揄するような論調が見受けられる。図書館へ行くのは虚栄心からで、まじめに勉強するのではなく手当たり次第読みあさるだけだ、などと言われると、腰を落ち着けて男子の中で読書するのはむずかしかったであろう。帝国図書館の婦人室の中をのぞき見したことを軽口めいてつづった文章さえ登場。〈中略〉女性利用者を軽んじる考え方が、昭和にはいっても、図書館の中にさえ、見受けられる。一九三一（昭和六）年の『市立図書館と其事業』に〈中略〉「如何なる理由であらうか、日本の女がまだまだ見得のために図書館通ひをして居る者があるのではないだらうか」というコメントがついているのである。

当時、女性が本を読む行為は遊びとされ、非難の対象とされていた。男性の好奇の目から女性利用者を守るには婦人閲覧室が必要であったのである。宮崎論文は婦人室には二つの役割があったとする。一つは「くつろぎの場」の提供である。婦人閲覧室は、家庭で自由に本を読むことのできない「女性がささやかでも知的欲求を満たすために」あったとしている。もう一つは「自学自習の場の提供」である。「勉強の意欲に燃える女性たちにとって、図書館の婦人室は「私たちだけの部屋」だった。これは宮本が「図書館」（前掲）で、婦人閲覧室を「女学校の寄宿舎の勉強室のやうであつた。同時に、友達同士で来てゐる人たちの私語がかなりやかましいやうなときもあつた」とする点と合致しており、帝国図書館も例外ではなかったようである。役所めいている帝国図書館で「くつろぎの場」とまではいかなかったかもしれないが、同館の婦人閲覧室も「自学学習の場」として活発に利用されていたと見て良いだろう。

このように、帝国図書館の婦人閲覧室は、開館当初こそ居心地が悪かったものの、増築によって快適な場へと変化し、女性に自由に本を読む場を提供し、交流の場としても機能したと見られる。

以上、同時代の女性作家のエッセイなどから、当時の女性による帝国図書館利用の実態を見てきた。では、これらの利用の在り方に対して、こほろぎ嬢における図書館利用はどうだろう

か。

「こほろぎ嬢」には、二人の女性の図書館利用者が登場する。一人は主人公こほろぎ嬢で、詩人「ゐりあむ・しやあぷ」について調べている。もう一人は「産婆学の暗記者」であり、「産婆学」の勉強をしている。こほろぎ嬢の利用目的が「効果ない時間殺し」、「地球上誰の役にも立たない行ひ」であるのに対し、「産婆学の暗記者」の目的は実益を伴うものであるため、先行研究では二人を対照的な存在としてきた(十一)。しかし、図書館を「自学学習の場」として利用している点では同じと言える。「産婆学の暗記」は、吉屋信子「図書館のこと」(前掲)にも見られるように一般的な利用の在り方であるが、詩人について調べることも、宮本百合子が「図書館」で言及する「学校の課目や勤めの義務以外の勉強をしている」女性利用者の類型に当てはまると言えよう。こほろぎ嬢の図書館利用の在り方は、当時の女性による利用実態と比較して特異ではない。

しかし、「産婆学の暗記者」のように閲覧室ではなく、「食堂」で勉強する利用の在り方は管見の限り、見られなかった。したがって、この利用の在り方は一般的でなかったと考えられる。そこで、以下、これについて検討する。

三、「産婆学の暗記者」をめぐって

三―一、「産婆学の暗記者」の不自然さ

前述したようにモデル館である帝国図書館において「食堂」で勉強する利用の在り方は一般的ではなかったと思われる。これは地下室が非常に暗かったことに一因があろう。帝国図書館の地下室食堂は菊池寛「出世」(前掲注八)で「昼でも蝙蝠が出さうな暗い食堂」と表現されるほど暗かった。本作においても「食堂」は繰り返し「薄暗い」と表現され、勉強には不向きな環境であるように思われる。なぜ「産婆学の暗記者」はそのような場所で勉強しているのだろうか。閲覧室の開館時間が過ぎたためである可能性もあるが、「産婆学の暗記者」が現れるのは五月の「夕方」である。帝国図書館『帝国図書館一覧』(帝国図書館、一九二六年九月)「帝国図書館規則」「第一條」に拠れば、季節や曜日に関係なく「本館ノ開館時間ハ午前八時ヨリ午後九時マデトス」とある。したがって、「産婆学の暗記者」は閲覧室の開館時間が過ぎたために「食堂」で勉強しているわけではないようである。食事中も勉強したいのであれば別だが、食事をする様子は見られない。それどころか、「限りなく暗記物の上に俯いてゐて、いつまでも同じポオズ」であり、異様なほど動かない。さらに、彼女は「地下室の一隅のもつとも薄暗い中」にいるとされる。勉強をしている人物が、ただでさえ「薄暗い」地下室の「もつとも薄暗い中」にいるのは不自然に思われる。

また、こほろぎ嬢は「鉛筆をけづる音」を聞くが、「産婆学の暗記者」が鉛筆を削っていたとすれば、いささか奇妙に思われる。食事をする場で鉛筆を削る行為は節度を欠いた行いではないだろうか。鉛筆を使用し本格的に勉強するならば、なぜ閲覧室に行かないのか、ますます不可解である。

「閲覧室」が開いているにもかかわらず、食事をするわけでもなく、「薄暗い」「食堂」の「もつとも薄暗い中」で鉛筆を削

り、「無暗と勉強をつづけ」、「限りなく暗記物の上に俯いてゐて、いつまでも同じポオズ」の人物。「産婆学の暗記者」は、実在の人物にしては不自然さが目立つように思われる。彼女は本当に実在しているのだろうか。そこで、「産婆学の暗記者」が現れる場面を考察し、この問題を検討したい。

三―二、「粉薬」の服用と「産婆学の暗記者」の出現

「しやあぶ氏」についての情報を得ることができなかったこほろぎ嬢は「頭痛」がひどくなり、地下室に下り「婦人食堂」に入る。そこで「粉薬」を服用し、会話をしたり、パンを食べたいと思ったところ、不意に「鉛筆をけづる音」が聞こえ、「地下室の一隅のもつとも薄暗い中」にいる「産婆学の暗記者」を見出す。

ここで注目したい点が二点ある。一点目は、語り手によって「粉薬」の服用が強調されていること、二点目は「産婆学の暗記者」がこほろぎ嬢の都合に合わせるように出現していることである。

まず一点目について、語り手は「こほろぎ嬢は古鞄の粉薬を服用したのである。人々は見られたであらう」と、こほろぎ嬢の「粉薬」の服用を「人々」が「見られた」ことを確認している。「粉薬」の服用を強調し、それが何らかの重要な意味を持つ行為であることを示唆していよう。「粉薬」とは、冒頭で「風のたより」が「神経麻痺剤のたぐひ」と非難したもので、中毒者は「身のまわりに在るところの生きて動いてゐる世界をば彼等に身勝手な意味づけから恐れたり、煙たがつたり、はては軽蔑したり」するようになる。すなわち、「粉薬」はこほろぎ嬢を被害妄想的・厭世的にさせるものとされる。「悪魔の粉薬のみすぎによつて、こほろぎ嬢は「多少重い神経病にかかつてしまつた」という。

この「粉薬」はおそらく、作者が常用していた頭痛薬ミグレニンであろう。『定本尾崎翠全集』下巻（筑摩書房、一九九八年十月）「年譜」に拠れば、翠は一九二四年にミグレニンの常用を開始し、一九二九年には多量服用が習慣化し、難聴などの副作用が出始める。一九三一年八月に幻覚症状が現れ始め、一九三二年九月、あまりに幻覚症状が激しいため、長兄の篤郎が翠を鳥取に連れ帰った。以後、翠が上京することはなく、事実上の作家人生の終焉となる、とある。

翠の幻覚症状について、林芙美子「落合町山川記（抄）」（『改造』一九三三年九月号）は、次のように述べている。

> 私は欧州から帰つて来ると、すぐまた戸隠山へ出掛けた。山で一ケ月を暮らして帰つて来ると、尾崎さんは軀を悪くして困つてゐた。ミグレニンの小さい壜を二日であけてしまふので、その作用なのか、夜になるとトンボが沢山飛んで行つてゐるやうだと云つたり、雁が家の中へ這入つて来るやうだと、夜更けまで淋しがつて私を離さなかつた。
>
> 眼の下の草原には随分草がほうけてよく虫が鳴いた。「随分虫が鳴くわねえ」と云ふと、「貴女も少し頭が変よ、あれはラヂオよ」と云つたりした。

『林芙美子全集　第十六巻』（文泉堂出版、一九七七年四月）

「年譜」に拠れば、芙美子が欧州から帰国したのは一九三二年六月であり、戸隠へ行ったのは八月二日から十六日にかけてである。すなわち、一九三二年八月頃に林芙美子は実際にトンボの幻覚やラジオの幻聴などの幻覚症状を起こす翠を見ており、その原因をミグレニンの副作用であると考えていた。

また、翠の恋人であった高橋丈雄は「恋びとなるもの」（『尾崎翠全集』（創樹社、一九七九年十二月）「付録月報」）で、翠から助けを求めるハガキを受け取り駆けつけたところ、「被害妄想のありったけ」を打ち明けられたという。高橋は翠を救うために同棲し、芙美子のもとへ相談に行くが、その際、芙美子は翠の神経病の原因をやはり「ミグレニンの中毒」だとしている。

「こほろぎ嬢」に先行する「歩行」（前掲）でも、ミグレニンが「頭の病気」を引き起こすとされている。ミグレニンを常用している青年詩人土田九作は「毎日薬ばかりのんで、おかしな文章を書いて」おり「頭の病気に罹つて居る」、「あの脳の薬を止めさせなければ駄目」、「土田九作くらゐ薬を用ひる詩人が何処にあるか。〈中略〉だから烏が真白に見えてしまふのだ」などと作中人物から非難されている。

以上を踏まえると、翠は林芙美子と同様、被害妄想や幻覚などの神経病の症状をミグレニンの中毒だと考えており、さらには、自分の症状に対する客観的な認識があり、それを作品に活用しようとする意図が窺える。したがって、こほろぎ嬢が「粉薬」を飲んだ直後に現れた「産婆学の暗記者」や「鉛筆をけづる音」も、ミグレニンの中毒による幻視・幻聴として描かれているのではないだろうか。「粉薬」の服用を強調する語りは、「産婆学の暗記者」の出現が「粉薬」の「服用」を契機としていることを示唆しているのではないだろうか。

そこで、二点目に「産婆学の暗記者」がこほろぎ嬢の都合に合わせるように出現していることに注目したい。「婦人食堂」に入った当初、こほろぎ嬢は「産婆学の暗記者」の存在に気づかない。しかし、こほろぎ嬢が「粉薬」を飲み、「会話をするとか、或はパンを喰べたくなる」と、突如、彼女は現れる。

こんな時、人類とは、大きい声で歌をどなるとか、会話をするとか、或はパンを喰べたくなるものだ。〈中略〉それでこほろぎ嬢は、いま、せめてパンを喰べてみようと思つた。丁度この時であつた。地下室の片隅から、鉛筆をけづる音が起つたのである。地下室の一隅のもつとも薄暗い中に一人の先客がゐた。そしてこほろぎ嬢は、もはや疑ふところもなく、先方を産婆学の暗記者と信じてしまつたのである。これはこほろぎ嬢にとつて丁度いい話対手であつた。

このように、「産婆学の暗記者」は、こほろぎ嬢が「会話」を欲した「丁度この時」に「丁度いい話対手」として出現する。二度も「丁度」という表現が使用されていることからもわかるように、彼女の出現はまるでこほろぎ嬢の都合に合わせたようである。しかし、「産婆学の暗記者」の出現は「粉薬」の服用が契機とみられる。「産婆学の暗記者」は実在の人間にこほろぎ嬢の心理が投影されたものではなく、彼女の心理を反映した幻覚なのではないだろうか。末國論文（前掲注1）は「産婆学」

が実学＝「パン」を得るための学問であることから「「パン」の世界を象徴するのが、「産婆学の受験者」とされる女性である」と指摘している。確かに、「産婆学」は「パン」を手に入れるための学問であり、彼女は「パン」の世界を象徴しているように思われる。これを踏まえると、「産婆学の暗記者」はこほろぎ嬢が「せめてパンを喰べてみようと思つた」、まさにその瞬間に現れることは非常に興味深い。「産婆学の暗記者」は「粉薬」の作用によって、こほろぎ嬢の「話対手」と「パン」を得たいという心理を反映し生み出された幻覚であるのではないだろうか。こほろぎ嬢が「話対手」や「パン」を欲するまで「産婆学の暗記者」の存在を「よほど長いあひだ」「知らなかつた」のは、そもそも「産婆学の暗記者」がそれまでそこに存在していなかったことを示唆しているのではないだろうか。

三―三、翠作品における幻覚

ミグレニンの常用を開始した一九二四年以降、翠は他作品でも幻覚を描いている。そこで、それらの作品群で幻覚がどのように描かれているかを検証し、「産婆学の暗記者」の描かれ方と比較したい。

「香りから呼ぶ幻覚」（一九二七年二月頃執筆）

失恋したお洋さんは煙草と牛乳を混ぜた香りを嗅ぐことで、失恋相手の幻覚を視て楽しむ。しかし、お洋さんは幻覚を引き起こす「高い煙草の為めに着物も、買へないでゐる」。「止めようと思つても、止められない」。幻覚そのものはお洋さんに甘い夢をみせるが、それは彼女の身を破滅へと導くものとして描かれている。

「木犀」（『女人芸術』一九二九年三月）

N氏の求婚を断った「私」の前に「チヤアリイ」（映画スターのチャーリー・チャップリン）が現れる。「私の心臓は沈黙の敬意ばかり呉れてゐるチヤアリイに向かつて素裸」になり、N氏への未練、N氏の求婚を断った真意を告白する。「チヤアリイ」は「私」が結婚しなかったことを批判し、「私」を置いて去る。「チヤアリイ」は「私」の心の奥底にある気持ちを告白させるものとして機能している。

「新嫉妬価値」（『女人芸術』一九二九年十二月）

「耳鳴り」が「俺」と自称し、「私」に語りかける。「私」と「耳鳴り」は「一つの肉体の中に一緒に棲んでゐる」とされ、「耳鳴り」は「私」の別人格のようにも思われる。「私」／「耳鳴り」の関係は、翠が強い関心を持っていたウィリアム・シャープ／フィオナ・マクラウド（十二）の関係に影響を受けたものと推察される。「耳鳴り」の発話は「」を利用して表現されており、幻聴と捉えられる。「私」は「耳鳴り」と会話するだけでなく、彼の指示に従って行動し、彼と「詩の合作」まで行っている。幻聴は「私」の別人格＝分身的なものであり、時に「私」を支配し、また時に詩作をする存在（創作の源泉）として機能している。

「第七官界彷徨」（前掲）

次兄二助の部屋で断髪されながら「いろんな匂ひ」（二助にかけてもらった香水や彼が煮る人糞の匂いなど）に包まれていた主人公小野町子は、睡気を感じて半覚醒状態になるうちに「霧のやうなひとつの世界」に迷い込む。そこで、町子は二助の「上つぱり」が「雲のかたちにかすみ、その雲は私がいままでみたいろんなかたちの雲に変つた」のを見る。また、二助の煮る土鍋の音が「祖母がおはぎのあんこを煮る音と変らなかつたので」、「六つか七つの子供にかへり」、「祖母のたもとにつかまつて鍋のなかのあんこをみつめて」いる幻覚を見る。さらに、二助の机の上を見ると、「机の上の蘚の湿地が森林の大きさ」に広がつて見え、二助が蘚の上をなでた綿棒は「箒の大きさにひろがつた」ように見える。これらの幻覚はなんらかの機能を果たすものではなく、「霧のやうなひとつの世界」、すなわち町子が希求する「第七官界」は幻覚の起こる世界であることを示していると思われる。

「途上にて」（『作品』一九三一年四月）

本作ではまず、「私」が図書館で読んだ「カラバンのなかにゐた一人の少年が、砂漠のなかで変な死にかたをしてゐた一篇」で「眼瞼のなかのこひびと」という幻覚を見る少年が登場する。

このこひびとと少年とのあひびきは、いつも人里はなれた丘で行はれることになつてゐました。灌木の繁みにかこまれた草のうへにながながと寝そべり、空に向けた眼をつぶると、彼の眼瞼の内側に女があらはれるのです。彼は女の窓下にかくれて口笛を吹き、女が眼をくれるのを待つ。しかしこの娘は一度だつて口笛の方に眼をくれたためしがない。それがよけい男の心を囚へる。

少年は「眼瞼の内側」に「美しい娘」の幻を見、彼女に恋している。少年は「眼瞼のなかのこひびとにめぐり逢ふために」カラバンに加わり、「四日のあひだ茫茫とした砂漠のなかを行き」、その翌朝、「屍体になつてゐる」のを発見されるが、彼の死因として砂漠地方の「風土病」が挙げられている。この「風土病」は壮年の男性に限り、この砂漠地方を二週間以上旅行すると、抑留されていた男の「ある種の心」が女性の幻影を創り出し、その女性が夢遊病のように男を外へ連れ出し、死に至らしめる、というものである。しかし、少年が砂漠に入ってからの時間は四日、年若い年齢、「祈祷」のような「死のポオズ」、そして、しなびていない「屍体」など、少年の死の状態は「風土病」の特徴と異なっていた。この違いは、少年の死が「壮年旅行者のやうなデザイア」ではなく、「一種の清しいマゾヒズムのやうな情念の、影のやうな冷淡な女に対する思慕の、だからひとつの信仰ともいへる想ひ」によるものであったためであろうとされる。幻の女性は男を死に至らしめるが、彼女を生み出す「心」が「デザイア」ならば醜い死を、「清しいマゾヒズムのやうな」「信仰」であれば、美しい死がもたらされる。

また本作には、二年前に絶交した「私」の旧友中世紀氏が登場するが、彼もまた幻覚であると考えられる（十三）。中世紀氏は「私」が好んでいる「妖婦型の女優」ナヂモヴァを否定する。さらに、中世紀氏は医者になることや結婚は父親にかけられた「暗示」によるものだったとし、それらを拒絶して田舎の教会

へ行こうとするが、「私」は彼に、神様は「暗示の外」なのかと尋ねてしまい、怒りを買って彼と決別する。

木屑の香から遠のき、原つぱの傾斜を下りながら私の部屋のみえる地点にくると、私の心はいくらか神様に関する話題から離れかかってきました。それで私はつひきいてしまつたのです。

「でも、神様はほんとの暗示の外に――」

「たくさんです」中世紀氏は私の問ひを蹴とばしました。

セクシュアリティを忌避し、信仰に生きようとする中世紀氏は、カラバンの少年と類似している。「私」はかつて絶交した中世紀氏に、カラバンの少年を投影した幻覚をみていたのだろう(十四)。中世紀氏は結婚することを理由に「私」と絶交した。しかし、たとえ氏が結婚せずとも、さらには幻覚であっても、彼が「私」の傍に留まることはなく、二人は決別する。「私」は中世紀氏にカラバンの少年が「眼瞼のなかのこひびと」に抱いていたような「報ひられない思慕」を抱いていたのではないだろうか。「報ひられない思慕」の対象としての幻覚は、「香りから呼ぶ幻覚」でお洋さんが視る幻覚と共通している。さらに、カラバンの少年の話で幻覚が死を招くものとして描かれている点も、お洋さんが幻覚を見るために身を破滅させていく点と類似が見られる。しかし、カラバンの少年の話にあるように、「デザイア」ではなく「信仰」に近い恋心が見せる幻覚によってもたらされる死（あるいは破滅）は、「美しい死」であり、必ずしもネガティブなものとして描かれてはいない。

以上、翠作品における幻覚を分析すると、①甘い夢を見せ、破滅させる〈幻覚〉②「報ひられない思慕」による〈幻覚〉③心の奥底にある気持ちを「告白」させる〈幻覚〉④分身としての〈幻覚〉⑤創作の源泉としての〈幻覚〉⑥「第七官界」の〈幻覚〉の六つの〈幻覚〉のパターンが見出せる。さらには、これらの幻覚が登場する作品のうち、対象が明確に幻覚であると語られる作品は「香りから呼ぶ幻覚」のみである。その他の作品における幻覚は、まるで実存のように語られるという特徴を持つ。幻覚か実在か空想か神経病による妄想か、明確に語られることはない。「こほろぎ嬢」において語り手「私たち」が冒頭で長々と「風のたより」を提示したあげくに「人々はそれ等の話によつて私たちのものがたりの女主人を、一人の背徳の女と決めてしまはれなくても好いであらう。何故といへば、私たちが並べた事々は、みな途上の風のたよりである」と述べるように、翠作品の語りには、このような曖昧さが多々見られる。主人公の異常性は語りによって表だって指摘されることは少なく、むしろ、幻覚を幻覚と語らないことで、主人公の異常性を隠蔽・寛容する傾向がある。

これらの幻覚とその語られ方の特徴に対し、「産婆学の暗記者」はどうだろうか。こほろぎ嬢は「声を使はない会話」で「産婆学の暗記者」に対し、次のような「告白」をする。

「御勉強なさい未亡人（この黒つぽい痩せた対手に向つて、こほろぎ嬢はこの他の呼び方を知らなかつた）〈中略〉暁けがたのこほろぎを踏んで、あなたの商売は毎朝繁盛しますやうに。こほろぎのことなんか発音したら、あなたはた

ぶん嗤はれるでせう。でも、私は、小さい声であなたに告白したいんです。私は、ねんぢゆう、こほろぎなんかのことが気にかかりました。それ故、私は、年中何の役にも立たない事ばかし考へてしまひました。でも、こんな考へにだつて、やはり、パンは要るんです。それ故、私は、年中電報で阿母を驚かさなければなりません。〈中略〉母親つて、いつの世にも、あまり好い役割りではないやうですわね。娘が頭の病気をすれば、阿母は何倍も心の病気に憑かれてしまふんです。〈中略〉霞を吸つて人のいのちをつなぐ方法。私は年中それを願つてゐます。でも、あまり度々パン！　パン！　パン！　て騒ぎたかないんです」

このように、「産婆学の暗記者」はこほろぎ嬢に、詩人として生きる故の「パン」を得られない不安、母への罪悪感、それでも詩人として生きたいという、心の奥底に潜む気持ちを「告白」させる機能をはたしている。これは、翠作品における幻覚の特徴③心の奥底にある気持ちを「告白」させる〈幻覚〉の機能と一致している。

また、先行研究では「産婆学の暗記者」を実在と捉えた上で、こほろぎ嬢の「分身」とする論がいくつか見られる。末國論文（前掲注一）は、こほろぎ嬢が「産婆学の暗記者」を「未亡人」としていることから、女一人で生きていかなければならない彼女は「いろんな意味で儚い生きもの」であるこほろぎ嬢と類似しており、「パンの世界を生きるもう一人の「こほろぎ嬢」といえるのではないか」と指摘し、「パンと自己の世界に引き裂かれた「こほろぎ嬢」にとって、「産婆学の受験者」は「憧憬の対象であると同時に、敬遠すべき対象」でもあり、「こほろぎ嬢」の一方の希望を鏡像として映し出す役割を果たしていたと考えられる」と述べている。

竹田志保「尾崎翠「こほろぎ嬢」論　「少女共同体」と「分裂」」（『学習院大学大学院日本語日本文学』二〇一〇年三月）は、フロイト『不気味なもの』（一九一七年）を参照し、フロイトの分身論が「「分身」とは、現実のいくつかの要因によって抑圧された自己の欲望や可能性が像として現前したものである」とするのを踏まえ、以下のように述べる。

（「産婆学の暗記者」は、こほろぎ嬢が勝手にそう思いこんだだけで）「実際はどのような人物であるか確かでない。しかし、そうであればなおさらこの「産婆学の暗記者」とは、こほろぎ嬢の無意識が反映された存在であるといえるだろう。〈中略〉この人物が、こほろぎ嬢にとって「産婆学の暗記者」でなければいけないのは、それがこほろぎ嬢が抑圧する要素の集合として導きだされた結果だからである。このとき、「産婆学の暗記者」とは、自己のなかにある理想的自己像としてではなく、抑圧した自己の「分身」としてこほろぎ嬢に回帰しているのである。つまり、これはフロイトのいう「抑圧されたものの回帰」であり、「不気味なもの」としての「分身」に相違ない。（〇）内は引用者）

青井詩織「尾崎翠研究――女主人公の影と彷徨――」（『富大比較文学』二〇一四年十二月）も、「産婆学の暗記者」の「「黒

つぽい痩せた対手」というイメージは影、分身を連想させる」と指摘している。

たしかに、「産婆学の暗記者」は「黒つぽい」「薄暗い」と表現され、影のような印象である。ドッペルゲンガーは「影の病」とも呼ばれていた。こほろぎ嬢の深層心理には「パン」を手に入れるには「産婆学」のような実学を学ぶべきだという意識があり、それが「産婆学の暗記者」という鏡像となってこほろぎ嬢の前に突きつけられていると考えられる。この「産婆学の暗記者」の分身性は、翠作品における分身の特徴④分身としての〈幻覚〉と一致している。

さらに、本作の語り手は「産婆学の暗記者」を幻覚であると明言せず、こほろぎ嬢の「産婆学の暗記者」に向けた無言の挨拶や「声を使はない会話」が通じなかった際、こほろぎ嬢のコミュニケーションの異常性を指摘しようとはしない。それどころか、そのコミュニケーションが通じない「産婆学の暗記者」の方が異常であるかのように「これは何といふことであらう」と、こほろぎ嬢と一緒になって嘆く。このような幻覚を幻覚であると指摘せず、主人公の異常性を隠蔽・寛容する語りの在り方は、前述した翠作品における幻覚の語られ方の特徴と一致している。

このように、「産婆学の暗記者」の機能とその語られ方には、翠作品における幻覚の機能と複数の類似が見られる。先行研究では「粉薬」と「産婆学の暗記者」の因果関係が注目されることはなく、彼女を実在と捉え、こほろぎ嬢が彼女に自分の深層心理を投影している、とされてきたが、「産婆学の暗記者」は「粉薬」が誘因した幻覚として描かれているのではないだろうか。

おわりに

本稿では、作中の舞台となった図書館のモデルとして帝国図書館の可能性が高いことを示した。その上で、同館の女性による利用実態を同時代作家のエッセイなどから調査し、「こほろぎ嬢」における図書館利用の在り方と比較した。その結果、「食堂」で勉強する「産婆学の暗記者」の利用の在り方は一般的ではないことが明らかとなった。

勉強しているにもかかわらず「暗い」地下室食堂の「もつとも薄暗い中」にいるとされること、食事をする場で鉛筆を削る非常識な行動、「いつまでも同じポオズ」で動かないことなどからみても、「産婆学の暗記者」には不自然さが見られる。そこで、この点に着目し、「産婆学の暗記者」について考察した。

作中では、こほろぎ嬢が「粉薬」を服用したことが強調され、その後、彼女の都合に合わせた形で「産婆学の暗記者」が出現する。また、作中の「粉薬」は当時の翠の状況から見て、被害妄想や幻覚などの中毒症状を引き起こすと考えられていたミグレニンと思われる。さらに、「産婆学の暗記者」の機能とその語られ方には、翠作品における幻覚の機能と複数の類似が見られる。「産婆学の暗記者」が幻覚であるならば、彼女の不自然さの謎も解消される。むしろ、その不自然さこそ、彼女が幻覚であることを示唆していたのではないだろうか。

「こほろぎ嬢」執筆時、翠は重度の幻覚症状に悩まされていた。翠は自画像としてこほろぎ嬢を描いたのではないだろうか。

こほろぎ嬢は「しやあぷ氏」が文学史から除外されていることに落胆するが、翠は憧れの人物を主題にした詩「詩二篇　神々に捧ぐる詩」「キリアム・シヤアプ」（『曠野』一九三二年十一月）で、シャープに対し「君は、／文学史から振りおとされた／微かな詩人。」「探しても／探しても／君の境涯なんか解んない。／すこし探し疲れたんだ。」と述べている。こほろぎ嬢のエピソードが翠自身の体験であったことが窺える。さらに、こほろぎ嬢は貧乏のために「年中電報で阿母を驚かさなければなりません」と言うが、同じく翠がモデルと思われる「木犀」（前掲）の「私」も、お金の催促のために「さて私は郷里の母に電報を打たなければならない。〈中略〉また金の御無心です」と述べている。前掲『定本尾崎翠全集』下巻「年譜」に拠れば、「木犀」執筆時の翠は郷里の母親の送金に頼っていたとあり、田舎の阿母に電報で仕送りを頼んでいたのは翠自身の実体験であると見られる。このように、こほろぎ嬢の行動は翠自身の実体験に基づいていると思われる。こほろぎ嬢の名は「名前をあかしてもあかさなくてもの生き物」とされ、最後まで明かされない。その明かされなかった名は尾崎翠なのかもしれない。本作は翠作品における幻覚小説の一つとして、また私小説的な作品の一つとして位置づけることができるのではないだろうか。

［注］

（一）末國善己「異端・図書館・分身――尾崎翠『こほろぎ嬢』試論」（『尾崎翠作品の諸相』二〇〇〇年六月、専修大学大学院文学研究科畑研究室）、三輪初瀬「尾崎翠『こほろぎ嬢』――女詩人の闘い――」（『国文目白』二〇〇四年二月）、金夏娟「尾崎翠「こほろぎ嬢」論――「両性具有」への恋、女詩人の生き方――」（『国文』二〇一〇年十二月）。

（二）「第七官界彷徨」で「祖母」は田舎に住んでいるため、「私」が祖母と暮らす「歩行」の舞台は田舎とも思われるが、「屋根部屋」や青年詩人土田九作の住居が「火葬場の煙突の北」にある点は、翠が当時住んでいた東京の下宿の特徴に一致する。

（三）「『こほろぎ嬢』の作品内時間は、「映画の幕の上」という言葉から、早くとも映画館が増加し始める関東大震災の後、すなわち、一九二〇年代半ばから、作品が描かれた一九三二年頃と考えられる」（前掲三輪論文）。

（四）これらの調査には、佐藤政孝『東京の図書館百年の歩み』（秦流社、一九九六年六月）、同『東京の近代図書館史』（新風舎、一九九八年十月）、同『図書館発達史』（みずうみ書房、一九八六年三月）、坪内善四郎『大橋図書館四十年史』（博文館、一九四二年九月）、千代田区立千代田図書館及び品川区立品川図書館のご教示を参照した。

（五）上野公園は「東京都台東区にある公園。武蔵野台地の東南端に位置し、俗に上野の山と呼ばれる」（国史大辞典編集員会『国史大辞典』第二巻（吉川弘文館、一九八〇年七月））。

（六）国土地理院「地理院地図（電子国土Ｗｅｂ）」（http://maps.gsi.go.jp/#15/35.719458/139.773769/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0l0u0f1）二〇一七年一月五日閲覧。

（七）「鉄骨煉瓦造としてコンクリートで壁体を固めた。〈中略〉外壁の張り方は、地下室は白煉瓦で、一階は石、二三階は石と煉瓦とで造つた。又、コンクリートの重量を軽くする為に、石灰糠を加

えたのも特色である」（前掲『上野図書館八十年略史』）。

（八）菊池寛「出世」（『新潮』一九二〇年一月）、芥川龍之介「大導寺信輔の半生――或精神的風景画――」（『中央公論』一九二五年一月）、小酒井不木「死の接吻」（『大衆文芸』一九二六年五月号）、岡本綺堂「読書雑感」（『書物展望』一九三三年三月号）など。

（九）一九〇六年十一月に「事務室七〇坪の木造一棟を建築」し、一九一三年三月に「更に閲覧室五五坪の二階木造建」、一九二一年三月に「閲覧室四二・五坪の二階建一棟を増築」。一九二七年～一九三〇年にも増築され「この増築は、地階を除き、三階建であつて〈中略〉旧本館が鉄骨煉瓦造であつたのを改め、鉄筋凝土造に改め、殊に外観は、旧館と同様なルネツサンス式を採つてその体裁を統一した。新館各室の配置は、地階に食堂及び機械室を設け、一階に館長室・応接室・事務室及び昇降機室を設け、二・三階は悉く閲覧室に充て、婦人室・貴重書室及び特別室に分つた」（前掲『上野図書館八十年略史』）。

（十）前掲『宮本百合子全集　別冊』の年譜に拠れば、百合子は一九一一年東京女子高等師範学校付属高等女学校（お茶の水高女）入学、一九一三年に上野の図書館に度々行った。同随筆にも「はじめてこの図書館へ来たのは、女学校の二年ごろのことであつた」とある。

（十一）たとえば、前掲三輪論文は「「産婆学の暗記者」とこほろぎ嬢とは、経済力と社会への迎合と、二重の意味で対照的なのである」と指摘している。

（十二）ウィリアム・シャープ（William Sharp）は実在したスコットランドの詩人・小説家・批評家。女性名フィオナ・マクラウド（Fiona Macleod）でケルト文学を発表。フィオナはシャープの中に存在した女性の別人格であったという。

（十三）中世紀氏と別れた後、「屋根部屋」に戻った「私」は彼に渡したはずの「きんつば」がいつのまにか部屋にあるのを見つける。このことから、太田路枝「尾崎翠「途上にて」論」（『阪神近代文学研究』二〇〇六年三月）や溝部優実子「尾崎翠『途上にて』〈失恋〉をめぐる物語」（『国文目白』二〇一五年二月）は中世紀氏が幻覚である可能性を指摘している。

（十四）太田論文（前掲注十三）、溝部論文（前掲注一三）

［付記］

本文中の尾崎翠作品の引用は初出に拠った。

（やまね　なおこ・本学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）